

第1回

死ぬ時ぐらい好きにさせてよ

地域包括ケア時代の在宅医療

令和元年6月8日(土)

講師：医療法人アスミス理事長 おおた ひでき 太田 秀樹 氏

当日受付の人が多くて会場は満席になった。岩上教育長による開校式の挨拶に続いて、講座に入った。入院と言えば、健康回復して退院するのが常識だった昔。超高齢社会の最近では、入院するとそのまま帰らぬ人が少なくない。入院後、食が進まず栄養失調になることもあるそうだ。太田先生、デンマークにてビールなどで楽しく過ごす終末期患者の姿を見て、地域包括ケアと在宅医療の道を拓かれた。その実態と終末期医療の意思決定の支援(ACP)を説明頂き、動画でも見せて頂いた。この例では、患者は高齢のご婦人だが、ひ孫とのやりとりとともに、食欲不振でも好きなアイスクリームを食べられたなど幸せな一生を過ごせたことがわかる。講座が終わってから、皆さん納得顔で拍手をされていた。6月10日に佐野ケーブルテレビでニュースとして報道された。



○参加者の感想・意見について（主なもの）

- ・最近の在宅医療がよく分かりました。少しずつ変わりつつあるのでしょうか。看取りの介護が大切。私もこうありたいと思いました。
- ・一人暮らしの私に在宅医療というものが可能かどうか、子供たちが同居、あるいは近くにいないと無理なのでしょうね。これから考えていきたいと思います。
- ・84歳です。最近物忘れが多くなりました。毎朝70分ほどのウォーキングをしていますが、認知症が大変気になります。